インドのインド太平洋政策と中国

プラシャント・クマール・シン博士
コーディネーター兼研究員
東アジアセンター
MP-IDSA、ニューデリー

想像され、再想像される地域

- 地域は社会的、政治的に構築されたものである。

- 地域と地域主義
  - ✓地域：歴史的な「相互作用と相互依存」によって形成された地理的アイデンティティ。
  - ✓地域主義とは、ある時代における政治的アジェンダとイデオロギー。

- インド太平洋：戦略、地政学的劇場、地域の再発見、新しい地域主義の構想

インド太平洋の再発見：
知的創世記（1850-1900年）

- 人類学、民族学、海洋生物学、海洋地質学
- オーガスタス・ヘンリー・キーン、C.スタニランド・ウェイク、F.ブルッゲマン、J.R.ローガン、J.E.アイブス、ロバート・E.C.スターンズ、W.H.ダール
- J.R. Logan, *Ethnology of the Indo-Pacific Islands* [1850], *Journal of Indian Archipelago*, April 1851.

- *アメリカ人類学者*
- *グレートブリテンおよびアイルランド王立アジア協会誌*
- *フィラデルフィア自然科学アカデミー紀要*
- *ロンドン王立協会紀要*
- *サイエンス*
- ***アメリカン・ナチュラリスト***
- *地質学雑誌*
- *ポリネシア学会誌*

インド太平洋の再発見：
知的創世記（1850-1900年）

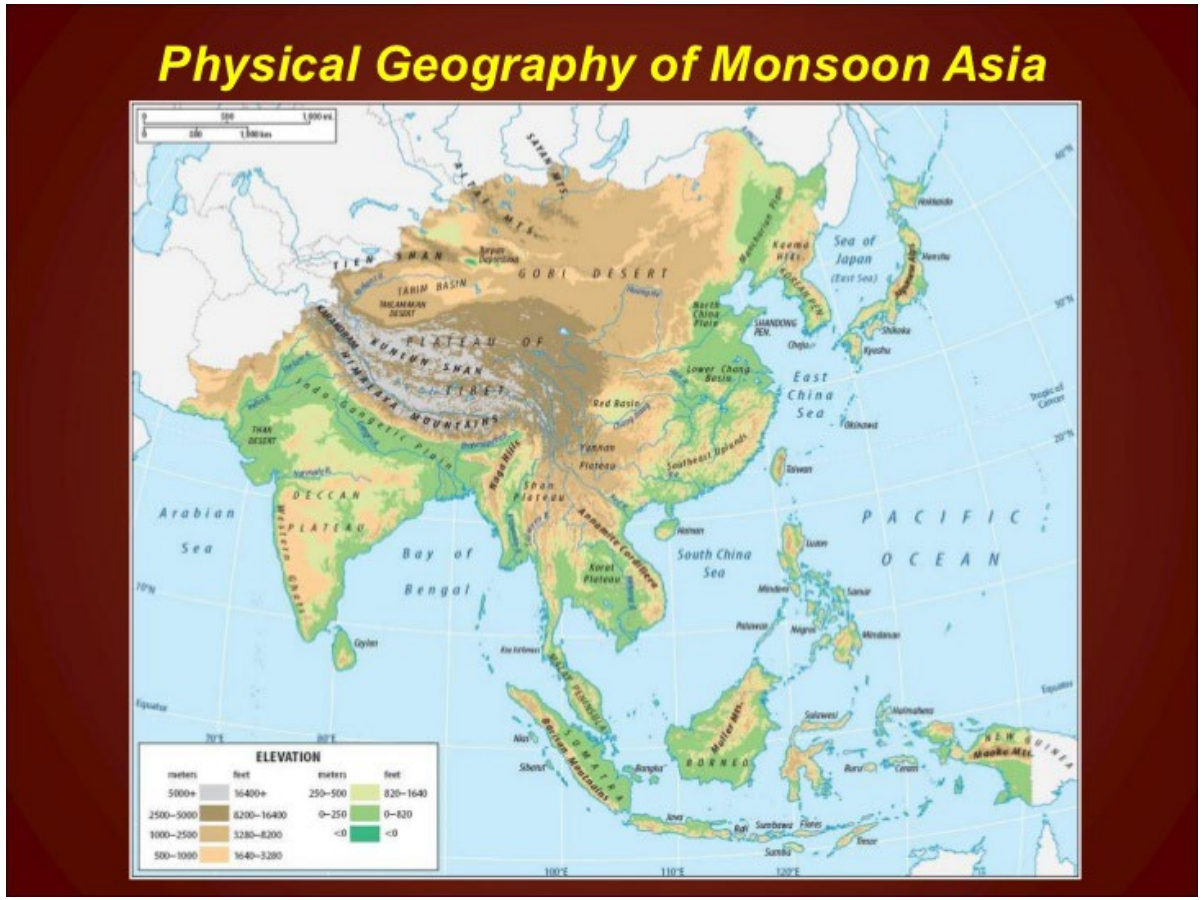
- 「インド太平洋は、旧世界と新世界の大きな陸塊によって三方を囲まれている。バラバラの陸地の断片が、この大洋のインド側と太平洋側を隔てており、マレー半島とオーストラリアとの間に多くの飛び石のように伸びている。後者はアフリカと南アメリカのほぼ中間に横たわる半大陸の塊である。"T. H. Huxley, "On the Geographical Distribution of the Chief Modifications of Mankind,", *The Journal of the Ethnological Society of London*, Vol.2, No.4, 1869-1870.
- 「インド太平洋または東洋地域（アフリカ東岸、アジア南部と東部、それに隣接する島々、オーストラリア、ポリネシアの島々を含む）に広く分布する種を指す。Edward J. Miers, "Crustacea", Philosophical Transactions of the Royal Society of London, Vol.168, 1879, p. 485.
- 1881-82年、*H.M.S.「アラート」の航海中にインド太平洋で採集された動物学的コレクションに関する報告書*。ロンドン：大英博物館管理委員会の命により印刷、1884年。

インド太平洋としてのマッキンダーのアジア・モンスーン・ランド（I）

マッキンダーのインド太平洋としてのアジア・モンスーンランド（II）

- 内陸のユーラシア大陸北部が "ハートランド"
- この周辺には、海上と陸上の両方の特徴を持つ周縁部または内側の三日月地帯がある：
  - ✓ヨーロッパ海岸 陸地
  - ✓アラビア砂漠
  - ✓アジア・モンスーン地帯＝太平洋方面の仏教とインド洋方面のヒンドゥー教の "勢力圏"
- 外側の三日月の土地

インド太平洋としてのハウスホーファーのモンスーン諸国



インド太平洋としてのハウスホーファーのモンスーン諸国（II）

- カール・ハウスホーファーが地政学的な文脈でインド太平洋という言葉を最初に使ったのは、1920年代から30年代にかけての著作である。
- 彼は地政学的に "インド太平洋に密集する人類とインドと中国の文化的帝国が与える影響 "を調査した。
- モンスーン諸国は「インダス河口からアムール河口まで広がり、東南アジアの沿岸部とアジアの中央高地の分水嶺を含んでいる」。
- 国際地政学の主役としてのモンスーン諸国。

スパイクマンのアジア地中海とインド太平洋 (I)

スパイクマンのアジア地中海とインド太平洋 (II)

- ニコラス・スパイクマンは、「ユーラシア大陸の支配にとって」ハートランド周辺のリムランドの重要性を強調している。
- 彼はモンスーンランドの概念を批判した。
- しかし彼は、インド洋沿岸とアジア地中海の地政学的重要性と相互作用は高まるだろうと主張した。
- インド洋沿岸とアジアの地中海は、今日のインド太平洋を形成している。

進化するアジア主義とインド太平洋

- 初期の汎アジア主義：
  - ✓ タゴール、ネルー、岡倉天心、アウンサン、スカルノ
  - ✓ 1920年代のインドにおけるアジア連盟
  - ✓ アウンサンのアジア連盟
  - ✓ ホーチミンの汎アジア共同体
  - ✓ 1947年と1949年のアジア関係会議
  - ✓ 1955年のバンドン会議
- アジア極東経済委員会（1947年）
- UNFAOのインド太平洋漁業評議会（1948年）
- 冷戦下のサブ・リージョナリズム
  - ✓ マフィリンド（マラヤ、フィリピン、インドネシア）、東南アジア条約機構、アジア太平洋協議会、東南アジア連合、東南アジア諸国連合
- アジア太平洋：太平洋貿易開発会議、太平洋経済協力会議、APEC

- APEC太平洋の世紀
- 中国の台頭とインドの成長
- 太平洋からアジアの世紀へ：西から東への地政学的転換
- 1994年のARFとサミット（2005年）は、インド太平洋プロセスにおける画期的な出来事だった。

現代のインド太平洋に関する言説

- 2004年津波後のクアッド諸国の協力
- インドの海洋ドクトリン2004
- 麻生太郎の「自由と繁栄の弧」＆安倍晋三の「二つの海の交わり」スピーチ（2007年）
  - ✓ 2つの海と米国、オーストラリアは、ユーラシア大陸の外縁に沿って自由と繁栄の弧を形成している。
- ヒラリー・クリントンの2010年ホノルルでのスピーチ
  - ✓ 世界の貿易・通商におけるインド太平洋地域の重要性
- オーストラリアインド太平洋戦略, 2012/2013
- 2012年の安倍晋三アジアのセキュリティダイヤモンド構想
- 安倍晋三の2016年基調講演 TICAD VI in Kenya："自由で開かれたインド太平洋戦略"
- 2017年、マニラで初の公式レベル（次官補レベル）のクアッドが開催された。
- 米国NSS（2017年）、NDS（2018年）、FOIPのビジョン、インド太平洋戦略報告書（2019年）

現代国際関係の枠組み

- 日本自由で開かれたインド太平洋戦略、2016年
- フランスインド太平洋戦略（2019年
- ドイツ2020年インド太平洋政策ガイドライン
- オランダ2020年、オランダとEUがアジアのパートナーとの協力を強化するためのインド太平洋ガイドライン
- 英国インド太平洋の傾き、2021年
- EUインド太平洋戦略、2021年
- チェコ共和国2022年インド太平洋協力戦略
- カナダインド太平洋戦略（2022年
- 大韓民国国家安全保障戦略、2022年

"アジア中心の戦略・経済システムの定義、...20世紀後半のアジア太平洋の考えに取って代わるもの...ルールの尊重と平等な主権を反映した多極的秩序の中に中国の力を取り込み、希薄化する戦略"(ローリー・メドカーフ)

- 海洋アジアの中心性
- 中国とインドの植民地支配以前の地位を回復させる。
- 戦略的懸念中国の単独行動主義
- 経済・開発パートナーシップ

インド人のインド太平洋に対する自己見解

- 「インド太平洋地域における民族的・文化的拡散のドラマにおいて、インドは非常に重要な役割を果たした」。カリダス・ナグ『*インドと太平洋世界*』1941年。

- 「太平洋は将来、世界の中枢として大西洋に取って代わるだろう。インドは直接の太平洋国家ではないが、そこで重要な影響力を行使することは避けられないだろう。インドはまた、インド洋地域、東南アジア、そして中東に至るまで、経済・政治活動の中心地として発展していくだろう。彼女の地位は、今後急速に発展していく世界の一部において、経済的・戦略的に重要な位置を占めることになる」。ジャワハルラール・ネルー、*インドの発見*、1946年

インド太平洋構想
インド外交の新たな知的枠組み

- 冷戦後、インドの外交政策は深刻な知的課題に直面した。
- ネルー的な基礎主義者とプラグマティスト／現実主義者の見解の闘いである。
- インド太平洋構想は2011年頃に外交言説に登場し、包括的な外交政策の枠組みを提供した。
- ネルー的な基礎付け主義者とプラグマティスト／現実主義者の見解を統合したものである。
- 戦略的自律性、パワーの集約、大国の地位の追求。
- インド太平洋における独立した影響力のある極となる。

インドのインド太平洋構想：公式見解

- インドのルック＆アクト・イースト政策の集大成
- インド洋と太平洋の統合：
  - ✓「自由で開かれた、包摂的で平和なインド太平洋は、ルールに基づく秩序と、持続可能で透明性のあるインフラ投資の上に築かれる。
- 現代の国際関係の枠組み
- 国際秩序のリバランシング
- 包括的な制度的枠組み
- コネクティビティへの取り組み
- グローバル・サプライチェーンの保護
- インド太平洋の安全保障
- インド太平洋とクアッドの関係

インドとインド太平洋の主要国との関係

- 米国はインドの次の発展軌道にとって極めて重要である。
- 印米防衛協定（2005年）、4つの基本協定、防衛調達パートナーシップの増加、ハイテク分野における協力の深化。
- 米国はインドを中国に対する長期的なヘッジと見ている。
- 日本はインドにとって最も摩擦の少ない成熟した戦略的パートナーシップである。
- オーストラリアは、その重要性が急速に高まっているパートナーとして見られている。

インド太平洋に対する中国のアプローチ

- 中国の公式文献は「インド太平洋」という言葉を、少なくとも肯定的には使っていない。否定的、批判的、疑わしい口調である。
- 当初は無視されていたが、後にクワッドと混同していたこのコンセプトを否定し始めた。
- 中国脅威論」の再循環、同盟関係を通じて中国の台頭を封じ込めようとするアメリカの戦略、地位や影響力、経済的・ハイテク的リーダーシップをめぐって中国との「ライバル関係」を推進するアメリカなどである。
- 米国は、クワッド、　米印重要新興技術イニシアチブ、インド太平洋経済枠組みなど、インド太平洋におけるパートナーシップや代替サプライチェーンに投資してきた。
- 中国はインド太平洋に対してますます批判的になっており、代わりに「人類の未来を共有する共同体」、「3つのグローバル・イニシアティブ」を推進している。

インド太平洋とインド・中国関係：
異なる解釈

- インドの理解では、中国はインド太平洋の大国である。
- その「一帯一路」構想は、まさにインド太平洋規模で動いている。
- AIIB、BRICS、SCOも、クワッドやIPEFと同様にインド太平洋メカニズムである。
- しかし、中国のインド太平洋に対するアメリカ中心の理解は、インドに対する見方を大きく変えている。

インド太平洋と印中関係：
内在する矛盾

- 友好への希求と猜疑の間で揺れ動く。
- この2つのアジアの巨人であり隣国であるインドと中国の関係には、摩擦がつきものである。
- 経済的相互依存、*チンディア*、アジアの世紀の双発エンジン。
- 国境紛争、チベット問題とダライ・ラマのダラムシャーラ駐在、そして中国とパキスタンの*全天候型友好関係*。
- 封じ込めに対する2つの相互認識：
  - ✓大国による中国封じ込めの一環としてのインド。
  - ✓南アジアにおける中国のインド封じ込め。

インド太平洋と印中関係：
亀裂を覆い隠す

- 2005年の印米原子力協定：ターニングポイント。
- 中国はインドが米国に傾くのを防ごうとした。
- 中国は2007年から2008年にかけて、クアッドに対するインドの熱意を抑えることに成功した。
- 軋轢は続いたが、互いを存亡の危機とは見ていなかった。
- しかし、2013年以降、急速に乖離が収束に取って代わった。

インド太平洋と印中関係：
中国によるインドとパキスタンの再形成

- 中国パキスタン経済回廊－一帯一路を一方的に推進する中国
- 国連安保理1267委員会でインドの決議に拒否権を発動する
- インドのNSG加盟申請を阻止する
- 370条撤廃とJ&K州分割後、パキスタンに代わって国連安保理に仲裁に入る

インド太平洋と印中関係：
インドは「歴史的ためらい」を捨てる

- モディは自己主張が強く、意欲的な外交政策を導入している。
- インドが「ひとつの中国」を支持していることに対して、互恵関係を要求する。
- モディはアメリカとの関係を深めることを重要視している。
- クアッドによるパワー集約のメッセージだ。
- インドは東南アジア諸国との関与を強めている：　南シナ海に対する立場が微妙に変化している：

  ✓フィリピン、ベトナム、インドネシアにブラモスミサイルシステムを販売する。
- インドは、代替サプライチェーンの構築のために先頭に立っている。

インド太平洋と印中関係：
生存モードの崩壊

- 2013年（デプサン）、2014年（チュマール）、2017年（ドクラム）。
- ガルワン・バレーの衝突（2020年）：1988年コンセンサスと文書による合意の崩壊。
- 国境では昨年まで4年以上にわたって異常事態が続いていた。
- インドは投資やビザの制限、アプリや直行便の禁止など、懲罰的な措置をとった。
- 中国は、全体的な状況は正常であり、境界紛争は適切な場所にとどまるべきだと主張した。
- インドは、国境地帯での部隊の接触からの離脱、緊張緩和、部隊の撤収を要求した。

インド太平洋と印中関係：
正常化の回復

- インドの3つの相互：相互尊重、相互感受性、相互利益。
- 中国の5つの相互：相互尊重、相互理解、相互信頼、相互融和、相互達成。
- 軍隊の接触からの離脱と緊張緩和は完了したと報告されている。
- 両国は現在、カイラシュ・マンサロヴァル・ヤットラの再開、（スマホ）アプリの解禁、（航空）直行便の再開など、残された問題に取り組んでいる。

インド太平洋と印中関係：
何が悪化と正常化をもたらしたのか？

- 中国が2020年にラダック東部の現状を変えた理由は定かではない。
- おそらくインドの対米傾斜は中国にとって顕著すぎる。
- 中国はインドへの希望を失い、戦術的優位を確保しようとした。
- 膠着状態に陥り、双方の足を引っ張ることになった。
- ウクライナ戦争に対するインドの立場は、インドの外交政策がまだ独立しており、対米接近は避けられないものではないことを中国に改めて確信させた。
- インドは中国に、インドは存立の脅威にはならないという以前の立場に戻るよう説得したようだ。

結論

- インド太平洋はここにあり、これからも残るだろう。それは、この地域に経済的・戦略的な力が集中していることを意味し、その周辺はよく定義されていないかもしれないが、核心はよく定まっている。
- 現時点では、地政学的な舞台という意味合いが強いが、（摩擦的なものだけでなく）協力的な交流の習慣によって、地域のアイデンティティーに近づいていくかもしれない。
- インドは、この地域を自然でまとまりのある地域と見なしている。
- 中国はインド太平洋の大国と呼ばれることを好まないかもしれないが、一般的な概念の理解によれば、すでにインド太平洋の大国である。
- インド太平洋地域と地域主義の最終的な性質は、インドと中国の協力に決定的に依存する。

- ご清聴ありがとうございました